

# フリ・アッカド語における能格・絶対格一致標識 — カトウナ・コーパスをもとに\* —

二ノ宮崇司（筑波大学大学院）

キーワード：言語接触、能格言語、対格言語、一致標識、コードスイッチング

## 1 はじめに

前二千年紀後半のオリエント世界はバビロニアやアッシリア、ミタンニ、ヒッタイト、エジプトといった列強諸国や小国が存在する時代であった。そして各国の文書（書簡、様々な契約文書など）の多くは当時の国際共通語であったアッカド語<sup>1</sup>で書かれた。アッカド語が大いに使われた時代であったが、アッカド語を母語としない書記も数多く存在した。ここでは、フリ語母語話者によって書かれたアッカド語（以下、フリ・アッカド語）を考察の対象にする。フリ人が確実にいたと推察される地域は、ミタンニ、ヌジ、アララハ、ウガリット、カトウナである<sup>2</sup>。カトウナ以外の地

\*本稿は、2003年12月に京都産業大学で開催された西アジア言語研究会でおこなった研究発表に加筆修正を施したものである。西アジア言語研究会でコメントを下された方々、また、論文執筆中にコメントを下された方々に感謝の意を表したい。そして、本稿をまとめるにあたり、池田潤先生、城生恒太郎先生、永井正勝氏からは多大なご教示を頂いた。本稿では、次の略号をもちいる。A=他動詞主語、O=他動詞目的語、S=自動詞主語（Dixon 1994:xxii）、一=一人称、二=二人称、三=三人称、単=単数、複=複数、男=男性、女=女性、共=共通性、過=過去形、完=完了形、未=未完了形、属=属格、引=引用符、強=強調符、従=従属符、関=関係詞、指=指示代名詞、接=接統詞、起=起点、場=場所。

<sup>1</sup>アッカド語（メソポタミア）の歴史の変遷は次のとおりである。

古アッカド方言（BC2500-2000 頃）

古バビロニア方言	(BC2000-1500 頃)	古アッシリア方言
中バビロニア方言	(BC1500-1000 頃)	中アッシリア方言
新バビロニア方言	(BC1000- 600 頃)	新アッシリア方言
後期バビロニア方言	(BC600-AD100 頃)	

<sup>2</sup>これらの地域にフリ人がいたかどうかの議論については、二ノ宮（2002）を参照。

域の言語記述・研究<sup>3</sup>はある程度進んでいるが、今回筆者が対象にするカトゥナの記述・研究はそれほど進んでいない。その点でカトゥナのフリ・アッカド語を研究する意義は大きいといえる。

カトゥナで書かれた文書としては、四百行弱にわたるカトゥナ出土の財産目録 (Virolleaud 1930 と Bottéro 1949 を参照)、エジプトに送られたカトゥナ発信の書簡 (EA52-56)、近年カトゥナで出土した六十点程のフリ・アッカド語で書かれた王室文書などが挙げられる。しかし、財産目録のテキストは名詞の列挙ばかりで動詞はほとんどなく、本稿の分析に不向きであるので使用しないことにする。また、近年カトゥナで出土した王室文書は未出版であるため、使用できない。EA52-56 はエジプトで出土しているが、書簡は出土地ではなく発信地で書かれているため、本稿のコーパスとして適切である。

アッカド語は格組織と一致形式の両面において対格型であり、フリ語はこれら両面において能格型である<sup>4</sup>。したがって、本稿は対格言語と能格言語との言語接触に関する研究だといえる。具体的には動詞に付加される一致標識に着目する。メソポタミアのアッカド語の「対格一致標識」は直接目的語である他動詞目的語 (O) と一致するのだが、フリ・アッカド語では時として他動詞主語 (A) に一致する場合がある。これはメソポタミアのアッカド語の規範に照らし合わせれば誤用ということになるが、本稿ではこの問題を言語学的に検証する。まずは Oppenheim (1936) の枠組みを紹介し、その上で「対格一致標識」が他動詞主語に一致する条件を探る。

## 2 アッカド語とフリ語の動詞付加の一致標識

まずはアッカド語の主格一致標識のパラダイムと対格一致標識のパラダイムを示す。主格一致標識は常に出現するが、対格一致標識は常に出現するわけではない。いずれも人称・数・性を標示する。以下のパラダイムに

<sup>3</sup>ミタンニ: Adler (1976)、ヌジ: Wilhelm (1970)、アララハ: Giacomakis (1970)、ウガリット: Huehnergard (1989)。

<sup>4</sup>アッカド語の名詞は S と A が主格語尾をとり、O が対格語尾をとる。フリ語の名詞は S と O が絶対格語尾をとり、A が能格語尾をとる。動詞に付加される一致標識は、アッカド語では主格一致標識が S と A に一致し、対格一致標識が O に一致する。フリ語では絶対格一致標識が S と O に一致し、能格一致標識が A に一致する。フリ語に能格の用語を初めてあてはめたのは I.M. Diakonoff による 1967 年の研究 (Jazyki drevnej Perednej Azii) だと言われる。細かなフリ語の能格性の研究史については、Wegner (2000:33-34) にまとめられている。

においてXは語幹を示す。

G 語幹と N 語幹					
単			複		
三共	i-X- $\emptyset$	彼が <sup>g</sup>	三男	i-X- $\bar{u}$	彼らが <sup>g</sup>
		彼女が <sup>g</sup>	三女	i-X- $\bar{a}$	彼女らが <sup>g</sup>
二男	ia-X- $\emptyset$	あなた (男) が <sup>g</sup>	二共	ia-X- $\bar{a}$	あなたたちが <sup>g</sup>
二女	ia-X- $\bar{i}$	あなた (女) が <sup>g</sup>			
一共	a-X- $\emptyset$	私が <sup>g</sup>	一共	ni-X- $\emptyset$	私たちが <sup>g</sup>
D 語幹と S 語幹					
単			複		
三共	u-X- $\emptyset$	彼が <sup>g</sup>	三男	u-X- $\bar{u}$	彼らが <sup>g</sup>
		彼女が <sup>g</sup>	三女	u-X- $\bar{a}$	彼女らが <sup>g</sup>
二男	nu-X- $\emptyset$	あなた (男) が <sup>g</sup>	二共	nu-X- $\bar{a}$	あなたたちが <sup>g</sup>
二女	nu-X- $\bar{i}$	あなた (女) が <sup>g</sup>			
一共	u-X- $\emptyset$	私が <sup>g</sup>	一共	nu-X- $\emptyset$	私たちが <sup>g</sup>
願望形					
単			複		
三共	li-X- $\emptyset$	彼が <sup>g</sup>	三男	li-X- $\bar{u}$	彼らが <sup>g</sup>
		彼女が <sup>g</sup>	三女	li-X- $\bar{a}$	彼女らが <sup>g</sup>
一共	lu-X- $\emptyset$	私が <sup>g</sup>	一共	i ni-X- $\emptyset$ → G 語幹と N 語幹 i nu-X- $\emptyset$ → D 語幹と S 語幹	私たちが <sup>g</sup>

図1: 古バビロニア方言の主格一致標識のパラダイム

単			複		
三男	+ <i>šu</i>	彼を	三男	+ <i>šumūti</i>	彼らを
三女	+ <i>ši</i>	彼女を	三女	+ <i>šināti</i>	彼女らを
二男	+ <i>ka</i>	あなた(男)を	二男	+ <i>kumūti</i>	あなた(男)たちを
二女	+ <i>ki</i>	あなた(女)を	二女	+ <i>kināti</i>	あなた(女)たちを
一共	+ <i>anni</i>	私を	一共	+ <i>niāni</i>	私たちを

図2: 古バビロニア方言の対格一致標識のパラダイム

図1と図2から、AがOを～するというパターンを、組み合わせが可能な限り作ることができる。動詞には、未完了・過去・完了・願望等のテンス・ムード・アスペクト(以下、TMAと略称する)が存在する。これを図式化すると次のようになる(図3)。

接頭要素は主格一致標識の前半部を、接尾要素1は主格一致標識の後半部を示しており、両面接辞を成している。そして、接尾要素2は対格一致

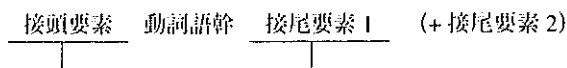


図 3: アッカド語の動詞形成

標識を示す。ただし、接尾要素 2 には対格一致標識以外に來辞（話し手に向かう行為を示す、+am~+nim）や間接目的語に一致する与格一致標識がくる<sup>5</sup>。例として、未完了語幹 -tarrak-「たたいている」に三単共の主格一致標識と二複男の対格一致標識を付加させたものを挙げる。

(1) i-tarrak-ø+kunūit<sup>6</sup>

三単共-たたく(未)-ø+二複男

彼／彼女があなたたち（男）をたたいている

次に、フリ語の能格一致標識のパラダイムと絶対格一致標識のパラダイムを示す<sup>7</sup>。これらの一致標識は人称・数を標示する（アッカド語と違い、性の区別をしない）。ここでは、動詞の基本形ともいえる直説法・他動詞・能格・肯定文の場合の能格一致標識のパラダイム（図 4）と絶対格一致標識のパラダイム（図 5）を示す。そして、両者が付加された例として (2) を挙げることができる。

	単		複	
一	+av	私が <sup>8</sup>	+avš(a)	私たちが <sup>8</sup>
二	+a	あなたが <sup>8</sup>	+aššū	あなたたちが <sup>8</sup>
三	+a	彼が <sup>8</sup> 彼女が <sup>8</sup>	+aš(a) or +ta	彼らが <sup>8</sup> 彼女らが <sup>8</sup>

図 4: 能格一致標識パラダイム (Wegner 2000:78)

<sup>5</sup> アッカド語の独立人称代名詞は主格、属格、対格、与格を区別する。名詞の格語尾には主格、属格、対格があり、与格は方向の前置詞 (ana) によって示される。動詞に付加される一致標識には、主格、対格、与格の区別がある。接尾要素 2 の形態素配列は、[來辞] + [与格一致標識] + [対格一致標識] である。

<sup>6</sup> ハイフン記号 (-) は語幹を挟み込む両面接辞を、イコール記号 (=) は接語を示す場合に使う。その他の形態素境界はプラス記号 (+) で示す。

<sup>7</sup> 一般的に一致標識の標識は接辞と考えられるが、フリ語学において能格一致標識は接辞と、絶対格一致標識は接語と呼ばれている (Friedrich 1939, Wegner 2000 等)。フリ語の能格一致標識が動詞に付加されるのに対し、絶対格一致標識は動詞だけではなく、接続詞や名詞にも付加される。このために、絶対格一致標識が接語と呼ばれていると思われる (Bickford 1998:273-291 参照)。

	長形 <sup>8</sup>	短形
一単	= <i>ta</i>	= <i>t</i>
一複	= <i>tilla</i>	= <i>til</i>
二単	= <i>ma</i>	= <i>m</i>
二複	= <i>ppa</i>	= <i>p</i>
三単	= $\phi$ /= <i>nna</i> <sup>9</sup>	= $\phi$ /= <i>n</i>
三複	= <i>lla</i>	= <i>l</i>

図5: 絶対格一致標識パラダイム (Wegner 2000:66, 80)

(2) *keban+oš+av=lla=man* (EA24,3:18 ミタンニ)

送る+過+一単=三複=しかし

私がそれらのものを送りました。しかし…。

### 3 フリ・アッカド語における能格・絶対格一致標識

メソポタミアのアッカド語では、「対格一致標識」はOに一致する。しかし、フリ・アッカド語ではそれだけではなく、その「対格一致標識」がAに一致する場合もある<sup>10</sup>。この「対格一致標識」の一致の揺れは、今回見ていくカトゥナ・コーバスでは、同一テキスト内で生じている。この現象はメソポタミアのアッカド語の文法体系から見れば一種の誤用として扱われるべきものである。本節では「対格一致標識」がAに一致する場合に、その動詞形成がどのようになっているのかを明らかにしたい。

この現象に最初に気がついたのはOppenheim (1936)であった。彼が提示した枠組み(図6)は現在でも通じる所があり、本節の土台としたい。

接頭要素	+	動詞語幹 <sup>11</sup>	+	接尾要素
1) 直接目的語を指示				1) 主語の人称と数を指示
2) 間接目的語を指示				

図6: Oppenheim (1936) の枠組み

<sup>8</sup>Wegner (2000:66) によれば、長形と短形の違いは不明であるという。

<sup>9</sup>Wegner (2000:66-67, 84-85) によれば、三単の所で= $\phi$ と=*n(na)*の違いが見られるが、= $\phi$ は自動詞文(逆受動文も含む)の動詞に付加され、=*n(na)*は他動詞文の動詞、接統詞、名詞に付加されるという。

<sup>10</sup>本稿では動詞に付加される一致標識に着目するのであって、名詞の格には着目しない。

<sup>11</sup>Oppenheim (1936) は、動詞語幹の所を動詞語根 (Verbalwurzel) としている。

Oppenheim (1936) の想定する接尾要素と接頭要素のパラダイムを示す(図2参照)。

単			複		
三男	+šū	彼が <sup>s</sup>	三男	+šumūti <sup>12</sup>	彼らが <sup>s</sup>
三女	+ši	彼女が <sup>s</sup>	三女	+šināni	彼女らが <sup>s</sup>
二男	+ka	あなた(男)が <sup>s</sup>	二男	+kunāni <sup>13</sup>	あなた(男)たちが <sup>s</sup>
二女	+ki	あなた(女)が <sup>s</sup>	二女	+kināni	あなた(女)たちが <sup>s</sup>
一共	+anni	私が <sup>s</sup>	一共	+niāni	私たちが <sup>s</sup>

図7: 接尾要素のパラダイム<sup>14</sup>

G 語幹 <sup>15</sup>						
i+	三人称を	三単男	三単女	三複男	三複女	
tu+	二人称を	二単男	二単女	二複男	二複女	
a+	一人称(単)を	一単共				
ni+	一人称(複)を	一複共				
D 語幹 <sup>16</sup>						
u+	三人称を 一人称(単)を	三単男	三単女	三複男	三複女	一単共
tu+	二人称を	二単男	二単女	二複男	二複女	
nu+	一人称(複)を	一複共				
S 語幹 <sup>17</sup>						
u+	三人称を 一人称(単)を	三単男	三単女	三複男	三複女	一単共
tu+	二人称を	二単男	二単女	二複男	二複女	
nu+	一人称(複)を	一複共				
願望形 <sup>18</sup>						
li+		三人称を	三単男	三単女	三複男	三複女
lu+		一人称(単)を	一単共			
ini+	→ G 語幹	一人称(複)を	一複共			
inu+	→ D 語幹とS 語幹	一人称(複)を	一複共			

図8: 接頭要素のパラダイム

<sup>12</sup>カトウナの EA 資料においては、アッシリア方言の+šumu が使われている。

<sup>13</sup>Richter (2003) で紹介されているが、アッシリア方言の+kunu が使われている。

<sup>14</sup>全フリ・アッカド語を対象とした二ノ宮 (2002) の調査において三単男、三単女、三複男が確認されている。

<sup>15</sup>二ノ宮 (2002) の調査において三単男、三単女、三複男、三複女が確認されている。

<sup>16</sup>二ノ宮 (2002) の調査において三単女が確認されている。

<sup>17</sup>二ノ宮 (2002) の調査において三単女が確認されている。

<sup>18</sup>二ノ宮 (2002) の調査において三複女が確認されている。

図8のパラダイムを見ると、接頭要素で性と部分的な数の中和が起きているのが分かる<sup>19</sup>。具体例を以下に挙げる。

- (3) *adu Zilipkiaše baḷ+u u DUMU<sup>MEŠ</sup> ša Zigi*  
 接 人名(女) 生きる+従 接 子供たち の 人名(男)  
*i+pallaḥ+šunūti*  
 三+敬う(未)+三複男  
 (HSS5,73:12-13 ヌジ)

*Zilipkiaše* が生きている限り、*Zigi* の子供たちは彼女を敬うべし。

他動詞 *ipallaḥšunūti* の A は *DUMU<sup>MEŠ</sup>* (複男) であるが、その主格一致標識は図1 (G 語幹) の *i-X-ā* (三複男) となっていない。さらに、O は *Zilipkiaše* (単女) であるが、その対格一致標識は図2の *+ši* (三単女) となっていない。しかし、Oppenheim (1936) の解釈によると A が図7の *+šunūti* (三複男) に、O が図8 (G 語幹) の *i+* (三) に一致して *ipallaḥšunūti* となり、この語形がうまく説明される。

Oppenheim (1936) は、図6の接尾要素が A 一致標識として扱われ、接頭要素が O 一致標識として扱われた点を強調して、主語 (A 一致標識) と目的語 (O 一致標識) の交代が起こっていると述べた。しかしこれ以降、接頭要素が O 一致標識であることはしだいに述べられなくなり、A 一致標識と O 一致標識の交代として説明されていく<sup>20</sup>。しかし、この現象は単なる A 一致標識と O 一致標識の交代ではない。A 一致標識が O 一致標識と交代しているというなら、O 一致標識は図9のような両面接辞のパラダイムが描けるだろう。しかし、この図9に対しては例(4)のような反例がある。

<sup>19</sup>性の中和については Oppenheim (1936:61) 自身も指摘している。ただし、Oppenheim は中和という用語は使わず、接頭要素は文法的な性に重きを置かない (Dem grammatischen Geschlecht des Objectes gegenüber legen diese Präfixe eine weitgehende Gleichgültigkeit an den Tag) としている。

<sup>20</sup>Gordon (1938:221)、Gordon (1956:129)、Huehnergard (1989:235) を参照。ただし、(3) の例は Gordon (1938:221) らの解釈でも説明がつく。A 一致標識と O 一致標識の交代とすると、図6の接頭要素 (図2の接尾要素2に対応) は、A (三複男) と一致して図7の *+šunūti* (三複男) となる。そして、図2の接頭要素と接尾要素1は O (三単女) と一致して図9の *i-X-ø* (三単女) となり、うまく *ipallaḥšunūti* となる。

G 語幹					
単			複		
三共	<i>i-X-ø</i>	彼を 彼女を	三男 三女	<i>i-X-ā</i> <i>i-X-ā</i>	彼らを 彼女らを
二男	<i>ta-X-ø</i>	あなた(男)を			
二女	<i>ta-X-ī</i>	あなた(女)を	二共	<i>ta-X-ā</i>	あなたたちを
一共	<i>a-X-ø</i>	私を	一共	<i>ni-X-ø</i>	私たちを
D 語幹とS 語幹					
単			複		
三共	<i>u-X-ø</i>	彼を 彼女を	三男 三女	<i>u-X-ā</i> <i>u-X-ā</i>	彼らを 彼女らを
二男	<i>tu-X-ø</i>	あなた(男)を			
二女	<i>tu-X-ī</i>	あなた(女)を	二共	<i>tu-X-ā</i>	あなたたちを
一共	<i>u-X-ø</i>	私を	一共	<i>nu-X-ø</i>	私たちを
願望形					
単			複		
三共	<i>li-X-ø</i>	彼を 彼女を	三男 三女	<i>li-X-ā</i> <i>li-X-ā</i>	彼らを 彼女らを
一共	<i>lu-X-ø</i>	私を	一共	<i>i ni-X-ø</i> → G 語幹 <i>i nu-X-ø</i> → D 語幹とS 語幹	私たちを

図9: A一致標識と交代している場合のO一致標識パラダイム

(4) *u amātu annātu ša ni-ltanappar-ø+u* <sup>D</sup>IŠKUR

接言葉 指(複女)関一複共-送る(未)-ø+従 神名

*bēl+ī* *u amanum li+meššer+šunūti=ma*主人+一単共属 接 神名 三(願望)+渡す+三複男=接  
(EA19:75-76 ミタンニ)そして、私たちが送りつづけたこれらの言葉を我が主である IŠKUR 神と *amanum* 神がかなえますように。そして、…。

他動詞 *limeššeršunūti* の主語は <sup>D</sup>IŠKUR *bēlī u amanum* (複男) であるが、A一致標識は *li-X-ā* (三複男) となっていない。そして、その目的語は *amātu* (複女) であるが、*+šunūti* (三複女) となっていない。これを A一致標識と O一致標識の入れ替えと考えると、A一致標識は図7の *+šunūti* (三複男)、O一致標識は図9(願望形)の *li-X-ā* (三複女) となり、*limeššerāšunūti* となるはずである。しかし、実際には *limeššeršunūti* となっており、図9のパラダイムは成り立たない。

そこで、筆者としては A一致標識と両面接辞の O一致標識が入れ替わったとは考えず、Oppenheim の見方を支持したい。では、なぜフリ人の書記



はO一致標識として図3の接頭要素と接尾要素1ではなく接頭要素のみを使ったのだろうか。この理由として、フリ語自体に両面接辞がないため、両面接辞に不慣れなフリ人の書記は図3に示した両面接辞(接頭要素と接尾要素1)を図11に示すような接頭要素のみに再編成したという可能性を指摘しておきたい。

以下、議論を進めるにあたり、いくつかの用語を定めたい。まず、A一致標識が図3の接頭要素と接尾要素1に対応している場合、この標識を主格要素と呼ぶ。O一致標識が接尾要素2に対応している場合、この標識を対格要素と呼ぶ。そして、この枠組みを対格型構造と呼ぶことにする(図10)。次に、A一致標識が図6の接尾要素に対応している場合、この標識を能格要素と呼ぶ。O一致標識が接頭要素に対応している場合、この標識を絶対格要素と呼ぶ。そして、この枠組みを能格型構造と呼ぶことにする(図11)。対格要素と能格要素は形式上同一である。データ分析の際に、文脈から能格要素か対格要素かを決定しなければならない。その議論をおこなう際にニュートラルな意味で「接尾要素」という用語をもちいる。

なお、対格型構造と能格型構造を比べてみると、接頭要素だけでなく、動詞語幹以降の要素にも特徴的な違いが見られる。対格型構造では動詞語幹の直後に $-\phi$ 、 $-\bar{a}$ 、 $-\bar{a}$ 、 $-i\bar{a}$ が現れるのに対し、能格型構造ではこれらは決して現れない。そして、対格型構造では接尾要素2のところに対格一致標識だけでなく来辞や与格一致標識が現れる場合がある。しかし、能格型構造では来辞や与格一致標識は決して現れない。

[対格型構造]

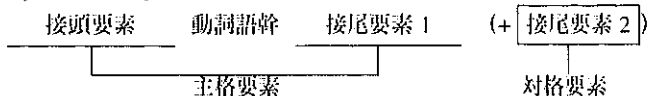


図 10: 対格型構造の枠組み (図 3 から)

[能格型構造]



図 11: 能格型構造の枠組み (図 6 から)

なお、本稿では自動詞および命令形は取り扱わない<sup>21</sup>。

#### 4 カトゥナ・コーパスにおける能格型構造

フリ・アッカド語、特にカトゥナ・コーパスにおいて、能格型構造は一体どのような条件のもとで出現するのだろうか。まずはカトゥナ・コーパスにおいて確実に能格型構造をとっている (5) と (6) の例を見たい。

- (5) ## *šumma bēl+ī* ERIN<sub>2</sub><sup>MES</sup> *u-šši-ø=mi*<sup>22</sup>  
 接 主人+一単共属 軍隊 三単共-出る (未)-ø=引  
 ## *aššum KAM.6.U<sub>4</sub>=mi i-zziz-ø=mi* ina [...] *ina* [...]   
 関与 六日=引 三単共-滞在する (過)-ø=引 場  
 ## *u lū i+lteqe+šunu azira ##* (EA55:22-24)  
 接 願望 三+手にする+三複男 人名 (男)  
 我が主人よ！もし軍隊が来て六日間 [...] に滞在するなら、軍隊が  
*azira* を捕らえますように。

動詞形	能格型構造	一致標識
<i>lū i+lteqe+šunu</i>	A=ERIN <sub>2</sub> <sup>MES</sup> → 三複 (性不明)	+ <i>šunu</i> → 三複男
	O= <i>azira</i> → 三単男	<i>i+</i> → 三

*lū i+lteqe+šunu*<sup>23</sup>となっており、三複男の A が *i-X-ū* ではなく +*šunu* と一致しているのが分かる。その結果、+*šunu* は能格要素、*i+* は絶対格要素と確定でき、能格型構造をとっているといえる。

- (6) ## *bēl+ī* [...] *aīṭukama [uṣe]* KUR.KUR<sup>tu</sup> LUGAL  
 主人+一単共属 人名 (男) 地名 土地 王  
*bēli+ja* *ina* [IZI<sup>MES</sup> *i-šarrip-ø*]+*šun[u]* ##  
 主人+一単共属 場 炎 三単共-燃やす (未)-ø+三複男

<sup>21</sup> 自動詞に関して、図 11 にあるように接頭要素を絶対格要素として捉えるなら、自動詞主語 (S) 一致標識が接頭要素のみで示される可能性がある。しかし、全フリ・アッカド語において、接頭要素だけが S に一致する例は見当たらない。また、命令形の接尾要素が能格要素になる例も見当たらない。

<sup>22</sup> 自動詞 *u-šši-ø=mi* は三人称単数形であるが、集合名詞 ERIN<sub>2</sub><sup>MES</sup> と一致している。

<sup>23</sup> 能格型構造の願望形三人称であるから、絶対格要素は *lū i+lteqe+* となることが予想されるが、ここでは *lū i+lteqe+* となっている。また、願望形は古バビロニア方言では過去形から派生するのに対し、ここでは完了形から派生している。

*u i+lteqe+šū*  $E_2^{tu}$  [...] ## *u*

接 三+手にする(完)+三単男 家 接

*i+lteqe+šū* 200 [...] ## *u*

三+手にする(完)+三単男 200 接

*i+lteqe+šū* 3 [...] ## *u*

三+手にする(完)+三単男 3 接

*i+lteqe+šū* [...] ## (EA53:28-34)

三+手にする(完)+三単男

我が主人よ! *aiṭukama* が王であり我が主人である者の土地 *upe* を炎で燃やしていました。そして、彼は [...] 家を手に入れました。そして、二百 [...] を手に入れました。そして、三 [...] を手に入れました。そして、[...] を手に入れました。

動詞形	能格型構造	一致標識
<i>i+lteqe+šū</i>	A= <i>aiṭukama</i> → 三単男	+ <i>šū</i> → 三単男
	O= $E_2^{tu}$ → 三単男	<i>i+</i> → 三
<i>i+lteqe+šū</i>	A= <i>aiṭukama</i> → 三単男	+ <i>šū</i> → 三単男
	O=2 ME [...] → 三複(性不明)	<i>i+</i> → 三
<i>i+lteqe+šū</i>	A= <i>aiṭukama</i> → 三単男	+ <i>šū</i> → 三単男
	O=3 [...] → 三複(性不明)	<i>i+</i> → 三
<i>i+lteqe+šū</i>	A= <i>aiṭukama</i> → 三単男	+ <i>šū</i> → 三単男
	O=[...] → (人称・数・性不明)	<i>i+</i> → 三

この例には、他動詞 *i+lteqe+šū* が四回出てくる。二番目と三番目の *i+lteqe+šū* の O は破損しているが、数詞から複数と考えられる。したがって、これらの *i+lteqe+šū* は能格型構造をとっていることになる。この文脈で能格型構造と対格型構造が入り混じるとは考えにくいので、おそらく一番目と四番目の *i+lteqe+šū* も能格型構造をとっているものと思われる。

しかし、他動詞が常に能格型構造をとるわけではない。例えば、次の(7)と(8)の例は確実に対格型構造をとっている。

(7) ## *bəl+i* *šumma arsauja ruḥizi u teuwalli lapana ina*

主人+一単共属 もし 人名(男)地名 接 人名(男)地名 場

*upe ašb+ū* ## *u taša ina amqi ašb+u* ## *u*

地名 いる+三複男 接 人名(男)場 地名 いる+従属符 接

*lū ī-de-ø+šumu bēli+ja ##* (EA53:56-59)

願望 三単共-知る-ø+三複男 主人+一単共属

我が主人よ！もし *ruḥizi* の *arsauja* と *lapana* の *teiwatti* が *upe* にいるのなら、そして *taša* が *amqi* にいるのなら、我が主人は彼らのことをご存知のはずです。

動詞形	対格型構造	一致標識
<i>lū ī-de-ø+šumu</i>	A= <i>bēli+ja</i> →三単男	<i>i-X-ø</i> →三単共
	O= <i>arsauja, teiwatti, taša</i> →三複男	+ <i>šumu</i> →三複男

(8) ## *u šumu bēli+ja aššum pānānum=ma ištu* UGU<sup>hi</sup>

接 名前 主人+一単共属 関与 昔=強 起 上

<sup>D</sup>UTU *i-šakkan-ø##* (EA55:64-66)

神名 三単共-置く(未)-ø

そして、我が主人は UTU 神のおかげで昔より有名にならしましょう。

動詞形	対格型構造	一致標識
<i>i-šakkan-ø</i>	A= <i>bēli+ja</i> →三単男	<i>i-X-ø</i> →三単共
	O= <i>šumu</i> →三単男	なし

## 5 能格型構造の出現条件

上で述べたとおり、アッカド語は対格型言語である。フリ人の書記も基本的にはメソポタミアのアッカド語に近い言語を書こうとしていたと考えるのが自然であろう。そう考えるなら、カトゥナ・コーパスに (7) や (8) のような対格型構造が出てくるのは当然である。ところが、カトゥナのフリ人の書記は時折、母語からの干渉を受けて、(5) や (6) のような能格型構造の文を書いてしまったものと思われる。これは、一種のコードスイッチングと考えることができよう。Grosjean (1982:145-146) によると、コードスイッチングは同じ（環境中の）発話あるいは対話の中で行われる二つ以上の言語の交替で、語、句、一つの文、複数の文のいずれかの単位で起きるといふ。Grosjean の定義に照らし合わせると、カトゥナ・コーパスでは同じ一つのテキストの中で接尾要素を対格要素のみに用いるアッカド語と接尾要素を能格要素としても用いるフリ・アッカド語との交替が起きて

いるといえる<sup>24</sup>。例えば(6)では、アッカド語の *i-šarrip-ø+šunu* (対格型構造) とフリ・アッカド語の *i+lteqe+šu* (能格型構造) が混在している。カトゥナ・コーバスの他動詞全51例中、能格型構造は8例に過ぎないので、カトゥナのフリ人の書記は基本的に対格型構造のアッカド語を書いていたといっていだろう。そして、時折、能格型構造のフリ・アッカド語へのコードスイッチングを起こしたものと考えられる。では、対格型構造から能格型構造へのコードスイッチングは偶発的に起きたのだろうか、それともコードスイッチングには何らかの条件があったのだろうか。この問題に取り組むにあたり、第4節の(5)-(8)の例から分かることを確認しておきたい。

まずTMAに着目したい。フリ語にはTMAの違いによる分裂能格性が見られるからである。Dixon (1994:99)によると、分裂能格性がTMAによって条件付けられている場合、能格マーキングは常に過去テンスあるいは完了アスペクトで現れるという。一方、Dixon (1994: 101) は、未来テンス、未完了アスペクト、否定極性、命令・勧告ムードでは、(過去テンスあるいは完了アスペクトの時ほど) 能格システムは働かないという<sup>25</sup>。Wegner (2000:87)によればフリ語では命令ムードと願望ムードでAとSの動詞に付加される一致標識が同じ形をとるという。そのため、カトゥナのフリ・アッカド語においても命令ムード・願望ムードの場合では対格型構造をとり、それ以外の場合で能格型構造をとる可能性が考えられる。確かに対格型構造の例である(7)では願望形をとっているが、同じく願望形の動詞をもつ(5)は能格型構造となっている。逆に、願望形以外のTMAでも能格型構造は出ている。能格型構造では願望形(5)以外に、完了形(6)、未完了形(EA55:55)が使われているが、対格型構造でも願望形(7)以外に、完了形(EA55:45)、未完了形(8)が使われている。したがって、能格型構造へのコードスイッチングがTMAによって条件付けられている可能性はないといえる。

別の可能性として語順による条件付けが考えられる。(5)と(6)に動詞

<sup>24</sup> アッカド語からフリ語へのコードスイッチングを起こしているのではない点に注意を要する。アッカド語からフリ語へのコードスイッチングとしてはアッカド語のAとOがきてフリ語の他動詞がくるような例が想定される。

<sup>25</sup> この現象は、世界の多くの能格言語で見られる (Dixon 1994:100 参照)。

が文頭に立つという共通性が見られるからである。しかし、対格型構造の例である(7)でも動詞が文頭にたっている。逆に、能格型構造においても動詞が最後に来る例(EA53:39とEA55:55)は見られる。語順と能格性に相関性があるか定かではないが、可能性として調査を試みた。

最後にもうひとつの可能性を検討したい。それは、一文中にAを示す名詞句が明示されていない時に能格型構造へのコードスイッチングが起きるという可能性である。(5)を見ると、能格型構造の *lū i+lteqe+šunu* のAは前文の *ERIN<sub>2</sub><sup>MES</sup>* を指しているのが分かる。また、(6)を見ると、複数回示される能格型構造の *i+lteqe+šunu* のAは共通して、前文の *aitukama* を指しているのが分かる。以下に示すように、カトゥナ・コーパスでは能格型構造の場合ほとんどにおいて一文中にAを示す名詞句が明示されていない。

以下の分析では、まずa)で文脈判断によって能格型構造(1)なのか、対格型構造(2)なのかを決める。接尾要素が付加しないものは自動的に対格型構造となる。また、接尾要素の人称・数・性が偶発的に同じになる場合は両方可能(3)となり、保留する。そして、接尾要素は現れているが、テキスト破損のために能格型構造か対格型構造かを判断できない場合に、不明(4)とする。次にb)で、Aを示す名詞句が明示されない(i)のか、Aを示す名詞句が明示される(ii)のかに着目する。ただし文の切れ目が不明の場合は分析対象外になる(iii)。最後にc)で、a)の型が本当にb)の条件に合致しているかの結果を出したい。

分析結果は次のとおりである(図12)。EA54とEA56では他動詞の例は見つからなかった。接尾要素の前の形態素境界以外は境界記号を省略してある。

EA52	他動詞	a) 1-2-3-4	b) i-ii-iii	c) 能-対
5	<i>amur</i>	2	i	対
11	<i>idd[u]kku</i>	2	iii	
15	<i>[i]nandin</i>	2	iii	
16	<i>[na]ndin+šunu</i>	4	iii	
19	<i>[nand]in+šunu</i>	4	iii	
31	<i>išriq+šunu</i>	2	ii	対
39	<i>lā ide</i>	2	ii	対
40	<i>lā ide</i>	2	i	対

42	<i>tzib+amni</i>	2	ii	対
----	------------------	---	----	---

EA53	他動詞	a) 1-2-3-4	b) i-ii-iii	c) 能-対
4	<i>amaššarma</i>	2	i	対
9	<i>[uše]sye</i>	2	ii	対
10	<i>[u]ba" a+šu</i>	3	i	
20	<i>[li]waššer+šu</i>	3	ii	
29	<i>[išarrip+ ]šun[u]</i>	2	iii	
30	<i>ilteqe+šu</i>	1	i	能
31	<i>ilteqe+šu</i>	1	i	能
32	<i>ilteqe+šu</i>	1	i	能
33	<i>ilteqe+šu</i>	1	i	能
35	<i>išakkan</i>	2	ii	対
39	<i>išarrip+šu</i>	1	i	能
47	<i>liwaššer</i>	2	ii	対
51	<i>liqbi</i>	2	i	対
51	<i>liddinūnim</i>	2	i	対
53	<i>išakkan</i>	2	ii	対
54	<i>liwaššer</i>	2	ii	対
58	<i>lū īde+šunu</i>	2	ii	対
61	<i>lige[mī]</i>	2	i	対
66	<i>irriš[ū]</i>	2	i	対
69	<i>uwaššaranni</i>	2	i	対

EA55	他動詞	a) 1-2-3-4	b) i-ii-iii	c) 能-対
5	<i>ubta"i</i>	2	i	対
15	<i>lišāl+šunu</i>	2	ii	対
19	<i>išabbat+šu</i>	3	ii	
20	<i>liwaššir</i>	2	ii	対
24	<i>lū ilteqe+šunu</i>	1	i	能
28	<i>ipattarū</i>	3	iii	
38	<i>īde+šu</i>	3	ii	
41	<i>išarrip+šunu</i>	2	ii	対
43	<i>ilteqe+šunu</i>	2	ii	対
45	<i>ilteqe+šunu</i>	2	ii	対
45	<i>ippa+šunu</i>	2	i	対
49	<i>liwaššir</i>	2	ii	対
50	<i>lū iṭṭur+šunu</i>	2	ii	対

52	<i>luddin</i>	2	i	対
54	<i>ītepuš+šunu</i>	1	ii	能-例外
55	<i>išakkan+šunu</i>	1	i	能
57	<i>ilteqe+šu</i>	3	ii	
58	<i>īde+šunu</i>	2	ii	対
61	<i>īfibaš+šu</i> <sup>26</sup>	3	i	
61	<i>liddin+šu</i>	3	ii	
64	<i>ītepušīni</i>	2	i	対
66	<i>išakkan</i>	2	ii	対

図 12: 他動詞の能格型構造と対格型構造

この分析において唯一の例外となるのが、次の例である。この例では能格型構造をとっているのに、一文中で A を示す名詞句が明示されている。

- (9) ## *bēl+ī*                      <sup>D</sup>UTU DINGIR *abi+ja*                      *abbūti+ka*  
 主人+一単共属 神名 神                      父+一単共属 祖先たち+二単男属  
*ī+tepuš+šunu* ## (EA55:53-54)  
 三+作る (完)+三複男  
 我が主人よ！あなたの祖先たちが我が父の神、太陽神（像）を作りました。

動詞形	能格型構造	一致標識
<i>ī+tepuš+šunu</i>	A= <i>abbūti+ka</i> →三複男	+ <i>šunu</i> →三複男
	O= <sup>D</sup> UTU →三単男	<i>i+</i> →三

対格型構造から能格型構造へのコードスイッチングを引き起こす要因が他にもあると考えざるをえないが、現時点ではそれが何であるかは特定できない。

以上、カトゥナ・コーパスにおいて、一文中に A を示す名詞句が明示されていない時に能格型構造となる条件があてはまるかどうかを調査した。結果的には、一例を除いて上の条件を満たしているといえる。では、なぜ一文中に A を示す名詞句が明示されていない時に能格型構造へのコードスイッチングが起きるのだろうか。それは、フリ人の書記が能格要素を接

<sup>26</sup> *īfibaš+šu* (過去形) は *i-īi\*-ba\*-šu* と綴られているが、解釈によっては *īfibaš+šu* (完了形) ともとることができる。



語として捉えているからではないだろうか。能格要素は A を示す名詞句に一致するのではなく、A を示す名詞句が明示されていない時にだけ補われる接語代名詞だと考えれば、能格型構造の例は (9) 以外すべて説明がつく。しかし、上で述べたとおりフリ語の能格一致標識は接辞であるため、今のところ確証はない。

## 6 おわりに

本稿では、アッカド語とフリ語の言語接触によって生まれたフリ・アッカド語における能格・絶対格一致標識の問題を扱った。最初にこの問題を扱った Oppenheim (1936) 以来、半世紀以上の時を経ているが、カトゥナ・コーパスにおいて能格型構造がどのような条件のもとに出現するのかという問題に取り組み、一つの解釈を試みた。筆者としては、対格型構造から能格型構造へのコードスイッチングを引き起こす要因は複数あり、その一つが一文中に A を示す名詞句が明示されないことだと考えている。

今後は、フリ・アッカド語全体で能格・絶対格一致標識がどのような出現傾向をもつのかを調査する必要があるだろう。また、カトゥナから出土したフリ・アッカド語の新資料が公刊された際には、能格・絶対格一致標識の問題を含め、カトゥナのフリ・アッカド語の包括的記述・研究が期待される。

### 【参考文献】

- Adler, H.-P. (1976) *Das Akkadische des Königs Tušratta von Mitanni*. Kevelaer: Verlag Butzon & Bercker / Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag.
- Bickford, J. A. (1998) *Tools for Analyzing the World's Languages Morphology and Syntax*. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Bottéro, J. (1949) 'Les inventaire de Qatna.' *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 43. 3-4: 137-215.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Friedrich, J. (1939) 'Kleine Beiträge zur churritischen Grammatik.' *Mitteilungen der vorderasiatisch-ägyptischen Gesellschaft* 42. 2: 1-67.

- Giacumakis, G. Jr. (1970) *The Akkadian of Alalah*. Hague/Paris: Mouton.
- Gordon, C. H. (1938) 'The Dialect of the Nuzu Tablets.' *Orientalia* 7: 32-63 / 215-232.
- (1956) 'Observations on the Akkadian Tablets from Ugarit.' *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 50: 127-133.
- Grosjean, F. (1982) *Life with Two Languages: An Introduction to Bilingualism*. Cambridge /Massachusetts/London: Harvard University Press.
- Huehnergard, J. (1989) *The Akkadian of Ugarit*. Atlanta: Scholars Press.
- Knudtzon, J. A. (1964) *Die El-Amarna Tafeln mit Einleitung und Erläuterungen*. Reprint. Leipzig: Hinrichs.
- Moran, W. L. (1992) *The Amarna Letters*. Baltimore/London: The Johns Hopkins University Press.
- 二ノ宮崇司 (2002) 「前二千年紀後半のオリエント世界におけるフリ人の分布について」卒業論文, 奈良大学.
- Oppenheim, L. (1936) 'Zur Landessprache von Arrapha-Nuzi.' *Archiv für Orientforschung* 11: 56-65.
- Richter, Th. (2003) 'Das „Archiv des Idanda“.' *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 135: 167-188.
- Virolleaud, Ch. (1930) 'Les tablettes de Mishrifé-Qatna.' *Syria* 11: 311-342.
- Wegner, I. (2000) *Hurritisch: Eine Einführung*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Wilhelm, G. (1970) *Untersuchungen zum Hurro-Akkadischen von Nuzi*. Kevelaer: Verlag Butzon & Bercker / Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag.

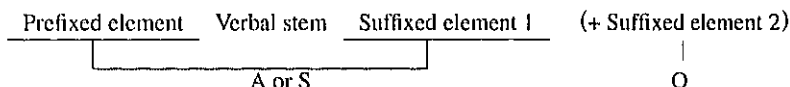
# Ergative and Absolutive Agreement Markers in Hurro-Akkadian — Evidence from Qatna Corpus —

Takashi NINOMIYA

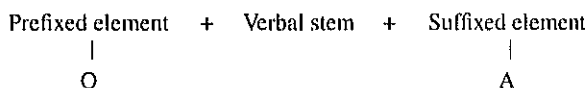
This paper deals with the verbal agreement markers in Hurro-Akkadian, the Akkadian written by Hurrian scribes. The case system of Hurrian is basically ergative-absolutive, and that of Akkadian, nominative-accusative. Hurro-Akkadian is a product of contact between languages with two different case systems.

It has been noticed that the morphemes that mark the transitive object (O) in Mesopotamian Akkadian sometimes mark the transitive subject (A) in Hurro-Akkadian. This follows that there are two types of clauses in Hurro-Akkadian, the accusative type and the ergative type. In the former type, as in Mesopotamian Akkadian, a set of morphemes, which consist of a prefixed element and a suffixed element (Suffixed element 1 below), mark A or the intransitive subject (S), while O is marked by another set of morphemes, which are suffixed after the suffixed element of an A/S marker (Suffixed element 2 below). In the ergative type, on the other hand, A is marked by the suffixed elements 2. This is not, however, mere switching between the two sets of morphemes. As Oppenheim (1936) suggested, the O markers of the ergative type make use only of the prefixed elements. The suffixed elements 1 are dropped, and the number and/or gender categories distinguished by them are neutralized. The two types of clauses can be represented schematically as follows:

[Accusative type]



[Ergative type]



We have found both types of clauses in our corpus, five letters sent from the rulers of Qatna to Egypt (EA52-56). The number of the accusative type clauses is larger than that of the ergative type clauses. This indicates that Hurrian scribes in Qatna basically wrote Akkadian-like accusative type clauses, but sometimes switched to the ergative type. The question is what caused this code-switching. Having examined possible causes such as tense/mood/aspect and word order, we reached the following working hypothesis: the code-switching occurs when the noun phrase corresponding to A is not explicit within the clause.

We tested this hypothesis against all the clauses in our corpus. Our hypothesis met a single exception, in which the code-switching was probably caused by another condition that we do not know yet. We may say that our working hypothesis is valid in our corpus, but it needs to be tested against the entire Hurro-Akkadian texts including some sixty tablets recently discovered from the royal palace of Qatna.

s0430062@ipe.tsukuba.ac.jp